

伊佐市リモート研修資料 2020.10.14

#### 4.5 歳児の発達と実践の課題

##### － 関係に生きる 4.5 歳児、子ども同士の関係に働きかける保育を

宮里六郎（元熊本学園大学）

#### 配布資料

- 1：4.5 歳児の発達と実践の課題（本資料）《当日使用》
  - 1 ページ～ 表紙（配布資料一覧等）
  - 2 ページ～ ① 4.5 歳児の発達と実践の課題
  - 4 ページ～ ② 子育てワンポイントアドバイス
  - 5 ページ～ ③ 運動会－新しい動向と課題
- 2：実績記録《事前に読んでおいてください》
  - 1 ページ～ 表紙（分析メモの書き方）
  - 2 ページ～ ① 実践記録「ツマラナイネ イツモ奈美チャンバッカリ」
  - 5 ページ～ ② 実践記録「カンケリってめっちゃおもしろいわ」
- 3：分析メモ（2 枚）《事前に行ってください》
- 4：今日学んだこと 5 行（1 枚）

○ オンライン中継の入口（インターネット URL）は、次の通りです。

伊佐市保育士等研修会 生配信 URL（前回と変わりません）

<https://www.city.isa.kagoshima.jp/blog/info-health/info-kosodate/26902/>

#### 【参考】 令和 2 年度 伊佐市保育士等研修 スケジュール

研修テーマ	「子どもの発達を学び子どもの気持ちに寄り添う」	
	日時	内容
日時・内容 (予定)  ※感染状況 により、変更 になる場合も あります。	第1回 9月16日(水) 18:30～20:30	3歳児の発達と実践の課題 ～ 一人前意識の3歳児、受けとめながら子ども同士の関係につなぐ
	第2回 10月14日(水) 18:30～20:30	4.5歳児の発達と実践の課題 ～ 関係に生きる4.5歳児、子ども同士の関係に働きかける保育を
	第3回 10月28日(水) 18:30～20:30	1.2歳児の発達と実践の課題 ～ 自我と表象が成立するす1.2歳児、気持ちを切り替える「間」を保障する
	第4回 11月11日(水) 18:30～20:30	ゼロ歳児の発達と実践の課題 ～ 有能で能動的なゼロ歳児、子どもが感じる「間」を保障する
	第5回 11月25日(水) 18:30～20:30	異年齢保育の動向と到達点 ～ 多様な人間関係から暮らしの保育へ

① 4. 5歳児の発達と実践の課題

ー関係に生きる4.5歳児、子ども同士の関係に働きかける保育を

宮里六郎 (元熊本学園大学)

1. 4. 5歳のことばの発達と内面 (4歳半は話し言葉の一応の完成期)

1) ことばに思いをのせて伝えようとする (事実の羅列、おしゃべり)

←事実をつたえるだけでなく

2) 考えてから行動しようとする

(立ち止まって考える。ひるみ、みとおし。なぐりあいではなく口げんかへ)

←行動してから考える3歳児

3) ことばが思考をにない始める (内言と外言、ひとりごと)

「子どもが考えるということは、心の中に引き込んだ仲間はまだおこっていない事実について相談すること」(いぬいたかし)

※ 「～ダケレドモ～スル」 感情及び行動のコントロール (自己制御)

・自己主張と自己抑制に折り合いをつける。

友だちと遊ぶ楽しさをバネに、自己抑制する力の芽生え。

2 4歳児の仲間意識 関係の中でもものをみる力の成立特に仲間関係

1) 友達と友達を比べて友達の特徴をつかむ

例 運動会前、足の速い友だちを自慢する我が長男<4歳>

2) 友達と自分を比べて自分に気づく<仲間をくぐって自分に気づく>

3) 相手の気持ちに目を向け始める<子どもは小さな心理学者>

例 家で掃除機をかけているお母さんに、「今日はお客さんが来ると?」

4) 友達の目を気にする それ故ひるみやおどけやふざけ、友達のせいにする子  
そして友達へのあこがれ、特訓

例 うんていができなかった5歳児、究極のおどけ

例 みんなのあこがれの君が遠足でおしっこを漏らした時の友だちの反応

例 竹馬三段階論

3 4歳児の仲間関係と仲間づくり

1) 構造的な人間関係

あそびをとりしきる子ー自分中心、しかしあそびをおもしろくする力

ボスとリーダーは紙一重、ボスは相対的な関係

あこがれとしてのリーダー

2) 力関係が固定化するまえの関係 幼児期のいじめと意地悪の区別

意図的悪意はない、力関係をさぐり確かめあうためのちょっかいや意地悪

山並、宮本実践

3) 関係に生きる4. 5歳児ー子ども同士の関係に働きかける保育を

★丸尾実践 「ツマラナイネイツモ奈美チャンバッカリ」

4 4歳児の仲間づくり

1) 目的を共有する活動に取り組む

目的を共有するから、できた喜びや失敗のくやしさが共有され仲間意識が深まる  
楽しさを共有する3歳児から、目的を共有する4歳児へ 運動会

2) トラブルがおきても先生に解決してもらうのではなく、自分たちで解決する力を  
そのためには、リーダーを育て話し合いの力を育てる

※ 保育者中心の話し合いから、リーダーを中心とした話し合いへ、  
<話し合いの指導>

- ①問うこと②答えを言わないこと、気づかせること③問いと答えの間を長くする
- ④理由を聞くこと⑤正当を求めないこと⑥間違っても発言できる雰囲気⑦いやなときは拒否できること⑧みんなで決めること

<リーダーづくり>

班内当番活動から、班当番へ移行。

リーダー（立候補、承認、再選可）、指導者でなくあこがれのリーダー

5 5歳児の仲間意識、仲間関係、仲間づくり

1) 仲間意識

①自分のことと同様に、相手の気持ちや状況を把握する力

それ故に、相手を欺く、うそをつく、本音と建て前の使い分け 「悪意」の目覚め  
例 カブトムシ事件

② 仲間の中に自分を位置づけ、自分の役割を認識する。「みんなの中の自分」

それ故、相手の気持ちや立場に立って考え行動する。

例 脳性麻痺の智ちゃんをめぐって 共同から協同へ 劇づくりで適役を選ぶ力

※ 「5歳児は小さな大人」 「小さな天使と悪魔が同居している5歳児」

2) 仲間関係

うそをついたりすると同時に、葛藤しながらも道徳的な自己を確立する。

人間はつまずいたり間違ったりしながら成長してゆくもの、許し合える関係を  
そのためには、保育者自ら失敗をさらけ出すことが重要

3) 仲間づくり

「一人はみんなのために、みんなは一人のために」（京都朱い実保育園卒園証書）  
当番活動から係活動へ

## ②子育てワンポイントアドバイス

### － 4. 5歳児、子どもは子どものなかで育つ

4. 5歳ともなる、子どもは子どものなかで育ちます。ある保育園の5歳児、泣き虫しんちゃんのカンケリをしたときの話しです。しんちゃんがオニをしたのですが、カンをけられて、泣きそうになりながら「オニ代わって」言い出します。すると、やまと君が突然ひたいに手をやり「おれらのときに汗びっしょりになった。しんちゃん汗まだかいてへん。おにちょっとしかやってへんし、やってほしい」ときびしく要求します。そばからなお君が「ぼくもまえけられてばっかしやったけど、がんばったし、しんちゃんもできるしやってみ」と励ましのことばをおくったのです。するとしんちゃんは、人が変わったとように敏速に動きまわり全員を見つけたのです。仲間に「しんちゃんすごいな」と認められながらも、ほっとした笑顔で「ほんまはみんなみつからへんやったどうしようと思ってたんや」と言ったのです。

しんちゃんがオニを辞めずに続けたのは、なお君の批判となお君のはげましという無意識の連係プレーがあったからです。保育者は見守っていただけです。子どもは子どものなかで育ち合うのです。親や保育者など大人が子どもを育てようとしすぎないこと、子どもは子どもなかで育つという確信と、大人ができることはほんの少しばかりという自戒が求められます。

同時に、4. 5歳代は、①友だちと友だちを比べて友だちの特徴をつかむ②自分も友だちと比べて自分に気づく③行動の背後にある友だちの気持ちも分かるようになる（小さな心理学者）④友だちの目が気になる、など友だち関係の中でもものを見るようになります。そうすると、あそびをとりしきる子など子どもの世界といえども力関係が構造化され固定化されてきます。その前後で、悪意なく、力関係を探り合ったり確かめあったりしています。それが時として、ちょっかいや意地悪や仲間はずしとして表面化することもあります。しかし幼児期の意地悪は、学童期のいじめにつながる意地悪とつながらない意地悪があるのです。子どもは真空のなかでは育ちません。子どもが自分自身で乗り越えることを信じて見守る力も求められます。また、保育園での友達との生活は、楽しいことは楽しいのですが、イヤな思いもしますし、背伸びしてがんばっているのです。子どもと一心同体になるだけでなく、ちょっと距離をおいて家庭ではがんばらない自分も出せるようにしてあげたいものです

### ③ 運動会—新しい動向と課題

励ますだけでなく不安を乗り越える保育を一過度な競争にもがき苦しむ子どもたち

運動会を通して子どもの実態と保育の課題を探ってみます。

熊本の黒肥地保育園はちょっと変わった「ひとりかけっこ（5歳児）」に取り組んでいます。その背景には、かけっこの練習をしようとしても集まらない。集まったかと思うとケンカが始まり、収まったかと思うと誰かがどこかに行ってかけっこが始まらない。走っても自分より速かった子の襟首をつかんで引き倒すのです。その背後には「一番になれ、がんばれ」という親の期待があったようです。競争社会のひずみが子どもたちの心にも反映されています。こんな様子から、競争ではなく「走る」ことそのものの楽しさを伝えたいと、ひとりかけっこに取り組んだそうです。

熊本のひまわり保育園は、運動会を「見せる・披露する場から、日頃子どもがあそんでいることを親子で体感する」親子スポーツフェスタに変えました。そのきっかけになったのが年長児 A 君です。A 君は何でもちょっと練習するとすぐできるようになるのですが、縄跳びはちょっと苦戦。それでも渋々練習して30回位跳べるようになったのです。ところが保護者から「先生が休んだら縄跳びの練習しなくてもいいのにと言ってます」と告げられたのです。担任は少し跳べるようになっていたのでもっと練習して自信がつくことを期待していたのでショックを受けたそうです。これまでは苦手なことでも仲間に支えられて挑戦してできた喜びが自信につながっていました。しかし A 君は、できてうれしそうでもなく、できたと喜ぶ様子もなく、自信にもなっていませんでした。運動会の期日までに「やらせて」いたのではないかと運動会を見直すことを提案したのです。『ちいさいなかま 2015年1月臨時増刊号』（ちいさいなかま社）

同じような姿は別の保育園でも起こってるようです。運動会に向けて鉄棒の逆上がりに取り組んでいたときのこと。一人なかなかできない子がいたので保育者がいっしょにがんばって練習したそうです。運動会の数日前になってやっとできるようになったので、どんなにその子が喜ぶかと思っていたら、「先生、モウコレデレンシュウシナクテイイヨネ」と子どもがうれしそうにつぶやいたのです。

今日のような市場化原理に貫かれた競争社会では、できないことができるようになったことが「できた喜び」ではなく「やらなくてもいい喜び」や「次はできないかもしれない不安」にもつながっています。できないかもしれない不安感を自分自身で乗り越えることが課題となっています。

これにヒントを与えてくれるのが三重のこっこ保育園の事例です

「リレーごっこは楽しめる T 君（年長）。最近『足が速くなったな』と言われていました。その日はかけっこをしようということになりました。でも T は『やらん…だって負けるもん』と言うのです。T がやりたいと思うように勝ち負けはつけずに楽しみますが、一向に入ってくる様子もない T。私は T の気持ちをそのまま周りの年長に伝えてみました。すると『いいよ。じゃまけたろ』と言うのです。そしてみんなはわざとこけて遅く走り見事 T は一位に。それでもとっても嬉しそうな T 君。その後何度もみんながわざと負けて楽しむのです。こけては大笑いの繰り返しがおもしろくなっているのです。そしたら『も

う本気をだしてもいいよ』と T 君。それから負けてもずっと楽しんでいました」（『季刊保育問題研究』254号新読書社）。

T君は負ける不安というより、1番になれない不安感があるのかもしれませんが。それにしてもまわりの子は素敵です。「がんばれば1番になれるよ」なんてお為ごかしなことを言わないで、わざと負けて1番にしてあげるのです。しかもただ負けてあげると T 君は同情されただけになるし、自分たちも楽しくないので、こけたりしながら楽しく負けてあげるのです。おそらく T 君の1番になれない不安感がまわりに子にも通じたからでしょう。そしてやっぱり T 君と一緒に走りたかったのでしょう。だから楽しく負ける方法を考えついたのです。今度はそんな友だちの気持が T 君に伝わったので「本気だしていいよ」と1番になれない不安感を乗り越えられたのです。

「負けても大丈夫」「一番じゃなくても大丈夫」という安心感があると、やってみようという「安心感に支えられた意欲」が生まれ、自ら挑戦するのです。過度な競争社会に生きる子どもたちに、目標や課題を設定して励ます前に、もっと丁寧に不安感を乗り越える手だてが必要ではないでしょうか

もう一つ事例（別府哲『自閉症児の発達と生活』全焼検出版部）を紹介します。音に過敏で、運動会のピストルの音が怖くて練習を嫌がる子どもがいました。担任はまず職員全員に「ピストルを一週間だけ使わないでください」とお願いしました。そして「ピストルは使わないから、安心して学校においで」と、その子に言ったのです。はじめのうちはまだ心配していましたが、3・4日経つと安心して練習に来るようになりました。その後「10時に一度だけ練習でピストルを鳴らすけど、そのときは耳をふさいでいいし、怖くないところに行ってもいいよ」と言って、それも何日か続けたそうです。運動会が近づく頃には、「ピストルが鳴るときにはちゃんと教えるから、耳をふさいでいいよ」というふうにしていったら、運動会当日にはピストルの音が鳴っても必死に耳をふさぎながらのりきったのだそうです。

子どもが何かを乗り越えるためには、がんばれと励ますよりも、おおらかにかまえて安心感を膨らませるほうが、子ども自ら乗りきる力が育つのではないのでしょうか